

時	論
新	論
理	想
論	

ラテンアメリカの古写真を求めて

齋藤 晃 (さいとう あきら)

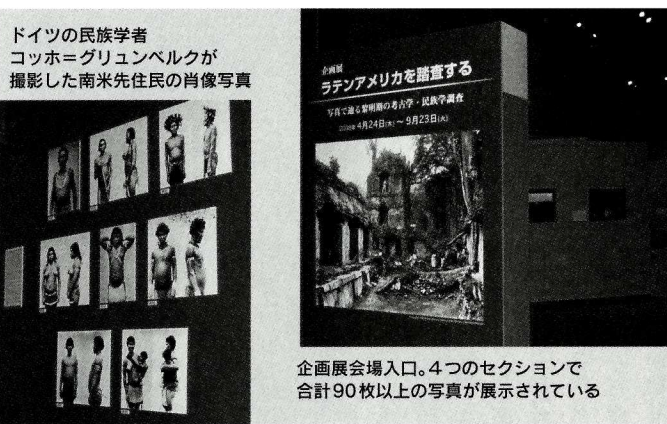
本館先端人類科学研究部

民博ではいま、企画展「ラテンアメリカを踏査する——写真で辿る黎明期の考古学・民族学調査」が開催されている(九月二三日まで)。この展示では、一九世紀末から二〇世紀初めにかけてラテンアメリカを踏査した四人の欧米の考古学者と民族学者の写真を紹介している。発掘当時の古代遺跡の状態や、近代化の波にもまれる以前の先住民の暮らしを鮮明に記録したそれらの写真は、研究資料として第一級の価値をもっている。写真はまた、当時の研究者の関心のありかや価値観、写す側と写される側の関係についても多くを語ってくれる。

被写体だけでなく撮影者も

わたしは企画展のプロジェクトリーダー(および唯一のメンバー)として、二〇〇四年からその準備にたずさわってきた。計画当初からわたしは、被写体だけでなく撮影者についても学べるような写真展を実施したいと考えていた。ラテンアメリカの遺跡や先住民についてはもちろん、彼らを調査した人びとの期待や思惑、感動や苦難についても理解を深めることができる展示を目指していた。それゆえ、写真の選定基準として、特定の学術調査の際に作成されたまとまったコレクションであることが最重視された。もともと、そのようなコレクションを

探したし、原板の所在を突き止めるのは、容易ではなかった。同僚からの情報や、本やインターネットで拾った情報を出発点とせざるをえず、その真偽を確かめるには、これはと思われる機関や個人に直接アプローチするしかなかった。運良く返事が来て、コレクションの存在が確かめられると、次にすべきことは、現地を訪れて写真を実見することである。こうしてわたしは、イギリス、ドイツ、アメリカの博物館や文書館、大学や研究所を渡り歩き、膨大な量の写真に目をおした。最終的に、マヤ地域、アンデス地域、アマゾン



企画展会場入口。4つのセクションで合計90枚以上の写真が展示されている

川流域、フエゴ諸島を踏査した四人の研究者に焦点を絞った。

圧倒的な歴史の証言

写真展の企画者としては情けない話だが、じつはわたしは写真を撮るのが苦手である。大学院時代、ポリビア・アマゾンで生活したときも、あまり写真を撮らなかった。撮影が下手というだけではない。人びとにレンズを向けることが、他人の家に土足で踏み込むような感じが、他人の為に思われて、ためらわれたのである。これでは調査者失格である。実際、再訪するたびに変貌している先住民の暮らしを目にする、なぜあのとときもつと写真を撮っておかなかつたのか、と悔やまれることがある。きつと彼らにとつても、貴重な記録となっていたらう。

企画展で取り上げた四人の研究者の著作を読むと、厳しい環境下、簡便とはいえない撮影機材と格闘し、被写体を説き伏せてなつかしい強引に撮影を敢行する彼らの姿が浮かび上がる。やらせもまれではなかった。もともと、彼らの振る舞いを植民地主義的といつて非難するのは、おそらく的外れだろう。彼らが撮影した写真は、約百年後の今日、歴史的証言として圧倒的な存在感を獲得しているのだから。その重みの一部を、今回の展示を通じて伝えることができれば、企画者として望外の幸せである。